

# 日本語聴解学習におけるメタ認知ストラテジーについての調査 —中国人学習者を対象に—

## An investigation into Meta-cognitive Strategies on Japanese listening comprehension learning of Chinese learners

陳 史琦、野崎 浩成

CHEN SHIQI, Hironari NOZAKI

愛知教育大学教育学研究科

Aichi university of education

Email: s221m026@aeu.ac.jp

あらまし：日本語の勉強において、中国人学習者は普遍的に聴解テストに限っては成績が最も低いといわれている。そこで、本研究では、東京にある日本語学校の日本語学習者を対象とし、メタ認知ストラテジーに焦点を当てて調査を行った。各々のメタ認知ストラテジーの使用傾向を比較し、その差異を分析することを通して、日本語学習者は聴解学習において、どのような現状があるのかを明らかにした。さらに、調査結果に基づき、学習者の学習方法の改善及び教師の教育方法を含む日本語聴解授業の在り方を検討した。

キーワード：メタ認知ストラテジー、聴解学習、日本語教育

### 1. はじめに

言語学習において、聴き取りが一番大切なところだと言われている。しかし、山本(2000)では、日本語能力試験 N1 の成績から、中国の学習者は他言語話者の学習者と比べて、語彙・文字・文法・読解の成績については最も高い成績を上げているにも関わらず、聴解テストに限っては成績が最も低いと報告している。聴解力というのは言語を学ぶ能力に大きな部分を占めていると言える。学習者の聴解力を上げるためには、まず学習者が「どのように聴いているか」という「過程」を明らかにすることが不可欠である。これまでの聴解についての研究では、学習者の聴解ストラテジーに注目していた。その中で、メタ認知ストラテジーが最も上位を占めているということが明らかになった(尹,2000)。また、O'Malley(1989)によると、効果的な聴解過程の特徴としてメタ認知ストラテジーを多く用い、特に「モニター」の使用が多いということも示された。だが、聴解学習で具体的にどのようなメタ認知ストラテジーを多めに使っているか、それと聴解力の関係はまだ解明できていない。

### 2. 研究の目的と意義

本研究では、性別、日本語能力、聴解レベル、出身地などの要因によって、学習者のメタ認知ストラテジーにどのような影響を与えるのかについて分析し、よりよい聴解学習の在り方について考えたい。以上の考えに基づき、本研究では主に以下の2点について明らかにすることを目的とする。

1、聴解の学習で日本語学習者がどのようなメタ認知ストラテジーを高頻度に使用しているのか。それと聴解力に関係があるのか。

2、出身地、日本語能力、聴解レベル、性別などの要因によってメタ認知ストラテジーがどのように違ってくるのか、何がその原因となり得るのか。

本研究の意義としては、研究の実施により、聴解学習で中国人学習者のメタ認知ストラテジーの使用を把握することと学習者自身も多くのメタ認知ストラテジーを使用できるようになることを期待している。聴解の点数を上げるだけでなく、言語学習の面にもいろいろなメタ認知ストラテジーを使って、日本語教育の充実に役立つかということについて、有益な示唆も得られると考えられる。

### 3. 日本語聴解学習におけるメタ認知ストラテジーについての調査

#### 3.1 調査対象

T学院(日本語学校)の日本語学習者(96名)を調査対象にした。研究対象の基本情報は以下の表の通りである。

表1 研究対象の性別・平均年齢・日本語レベル一覧

人数(女性/男性)	96名(26/70)
平均年齢(歳)	21歳1ヶ月
日本語レベル	上級18名、中級54名、初級24名

(注：日本語レベルは日本語能力試験によって分ける。上級はN1、中級はN2とN3、初級はN4とN5に相当する。)

#### 3.2 調査方法と分析方法

調査は、2022年11月中旬から11月末までに行った。質問項目(表2のS1~S16)は日本語で書かれているが、中国語の翻訳もついている。調査票は授業内で配分し、各質問項目を、5段階(5点：とても当てはまる～1点：全く当てはまらない)で評定してもらい、約10分後に回収した。データを収集し、spssproでt検定と分散分析を行った。

#### 3.3 結果

表2に、メタ認知ストラテジーの項目とその平均得点を示した。学習者全員の分析結果から、学習者の特徴としては、聴解活動における情報の理解を深めたり修正するために、問題箇所の予測・推測に際して「キーワード」、「文脈」を用いている(S2, S5)。

表2 メタ認知ストラテジーの項目と平均点

メタ認知的モニタリング S1-S8 (3.10)	n=96
S1.「最初に情景を述べる話に注意して聞いて、これからどんな会話があるかの想像する」	3.16
S2.「分からないところは前後の繋がりから推測する」	3.28
S3.「定義や長い説明などを自分で省略できれば、もっと簡単にわかりやすくノートを書ける」	2.94
S4.「このように」とか「いったい」というような大事な文の最初の言葉に気を付ける」	3.05
S5.「キーワードや定義を説明する前後の言葉(メタ言語)に注意して聞く」	3.21
S6.「全体の意味や流れに注意して聞く」	2.95
S7.「シャドーイングの練習で、自分の使った日本語が間違った時、二度とまちがわないように努力して勉強する」	3.14
S8.「聴解テストの結果や先生からのフィードバックをもらったら、その原因を分析して、今後の対策を練る」	3.04
メタ認知的コントロール S9-S16 (2.90)	
S9.「わからない言葉があってもできるだけ書いて、後で調べよう意識している」	3.20
S10.「聴解力を高めるための目標を立てて、それに向けてがんばる」	3.05
S11.「日本の歌をきく、日本の映画やドラマのビデオをみるようにする」	3.48
S12.「日本人と話す機会を見つけようとする」	3.07
S13.「クラスメートと日本語で会話するようにする」	2.35
S14.聴解授業前自分なりに、がんばろうと思う目標をもって授業に望む	2.69
S15.聴解授業前予習や授業の準備をしておく	2.30
S16.聴解成績を高めるため、効果的な勉強法や良い教材などについて自分から積極的に情報を収集する	3.02

また、細部まで聞き取ろう(S9)、聞き取れた内容を確認しようという意識が強い一面も見られた。しかし、授業外で自立して聴解能力を磨くために目標や計画を立て、自発的に学習する意識がそれほど高くないという一面も見られる(S15)。

出身地、日本語能力、聴解レベル、性別などの要因によってメタ認知ストラテジーがどのように違ってくるのかを考察したところ、①出身地と関連性が低いことが示された。②日本語能力レベルはストラテジーに影響をされない。③聴解レベルが高いほどメタ認知ストラテジーが多く使用している傾向にある(表3)。

表3:聴解能力別の平均値と分析結果

変数	聴解レベル	n	平均値	標準偏差	F	P
メタ認知ストラテジー(全項目の合計点)	苦手	48	45.083	8.341	9.142	0.000***
	普通	39	49.564	6.793		
	得意	9	56	7.632		
	合計	96	47.927	8.315		

注：\*p<0.1, \*\*p<.05, \*\*\*p<.01。

④女性より男性の方がメタ認知ストラテジーのモニタリングをよく使っている(表4)。全体的にメタ認知ストラテジーの使用は性別と関連性が低いなどが示された。一般に、女性の方が、男性よりも、より高い頻度でメタ認知ストラテジーを使用することがあるので(伊東、1993)、本研究において、先行研究と逆の傾向が見られた。その理由として、対象者の中で、聴解能力「得意」を答えた学習者9人の中で、8人は男性だった。これは結果に影響を及ぼした可能性がある。

表4 男女別の平均値と分散分析の結果

変数	性別	n	平均値	標準偏差	t	P	平均偏差	Cohen's d 値
モニタリング	男性	70	25.429	5.299	2.02	0.045**	2.467	0.466
	女性	26	22.962	5.288				
	合計	96	24.76	5.382				
コントロール	男性	70	23.2	5.126	0.11	0.912	0.123	0.025
	女性	26	23.077	3.989				
	合計	96	23.167	4.825				

注：\*p<0.1, \*\*p<.05, \*\*\*p<.01。

### 3.4 考察

出身地による差が見られなかった理由として、①出身地は北部、南部に分けて、同じ地域でも方言の違いがあるのを見過ごした。このことが結果に影響を及ぼしたかもしれません。②日本語能力の方が聴解能力以外にも言語知識、読解能力など様々の要因が影響していると考えられるので、日本語能力レベルの要因によって違いが見られなかった。③聴解レベルに合わせて、音声情報の処理する能力が上がり、メタ認知ストラテジーの使用意識が強くなる。④男性がメタ認知のコントロールを上手く使用している。それは、女性と比べて、男性の方が冷静で感情をコントロールする、改善に向けて行動を変え工夫することも言われるので、これが原因として考えられる。

### 4. まとめ

以上の結果から、今後の日本語教育に役立つ知見として、次の点が挙げられる。教師の教授方略が学習者のメタ認知ストラテジーを多く使うことを促す。例えば、授業中でも面白い日本語動画を流したり、学習者にロールプレイさせたり、日本語の興味を持たせるような活動を多く行う。また、授業外の予習、復習がとても大切だと何回でも強調する。目標設定や計画の達成度について確認する方策を実施することも授業でやっていくのも良いと思われる。また、聴解レベル上位者は多様なメタ認知ストラテジーを使用している。教師は学習者に対して、多様な学習ストラテジーの使用を促し、学習ストラテジーをよりよい方向に変容するように導くことが求められる。

#### 参考文献

- (1) 尹松：聴解ストラテジー使用と聴解力の関係について：日本語を主専攻とする中国人大学生の意識調査の結果から(三木紀人先生退官記念号)[J]. 言語文化と日本語教育, 2001(21):58-70. (2001)
- (2) 伊東祐郎：「日本語学習者の学習ストラテジー選択」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19, 77-92. (1993)
- (3) O'Malley, J.M. & Chamot, Learning strategies in second language ambridge: Cambridge University Press. (1989).
- (4) 山本富美子：「中国語系日本語学習者の聴解力と有声・無声破裂子音の弁別能力の調査・分析結果題番号10680307」(2000)